

中途終了型発話文「～と思って。」の引用部分とその使用文脈

張 季媛

Expressions in the Quotations and Contextual Characteristics of “～to omotte.” Suspended Clauses

Zhang Jiyan

Abstract

This paper aims to identify the expressions that directly antecede the “to omotte” of “～to omotte.” suspended clauses and the contextual characteristics of its use. The analysis reveals that the expressions directly preceding “to omotte” can be divided into five categories in terms of the modality of the expressions. The analysis shows that unlike “～to omotte, ...” complex sentences, the expressions of “～to omotte.” tend to differ in the appearance of all types of expressions except for Type IV (“Expression of intention and will [explicit]”). In particular, compared to “～to omotte, ...”, it has a unique feature that the expression containing uncertainty elements (Type III) was observed frequently in “～to omotte.” Furthermore, in addition to the use and function of the “explanation of circumstances” observed in “～te.” suspended clauses, “～to omotte.” also has the use and function of expressing the speaker’s thoughts. Additionally, corresponding to the aforementioned expressions, it can be divided into five uses and functions: “Expression of request (Type I)”, “Expression of judgment and attitude (Type II)”, “Expression of judgment containing uncertainty (Type III)”, “Expression of intention and will (explicit) (Type IV)”, and “Expression of intention and will (implicit) (Type V)”. Among these uses and functions, those of type II and type IV can also express “accusation” when used to evoke the thoughts of the interlocutor. Moreover, the observation of the following context of “～to omotte.” reveals that almost all “～to omotte.” Suspended Clauses are used in the same contexts, excluding the uses and functions of Type V”. Of these contexts, one situation is when the speaker forecasts the high potential of a gap occurring with the interlocutor because of differing amounts of information; the other situation is when the speaker forecasts a high possibility for the interlocutor to have a negative attitude toward the thoughts of the speaker.



目次

1. 研究の目的と研究の対象
2. 先行研究の検討と残された問題点
 - 2.1 中途文「～て。」の意味・機能に関する研究
 - 2.2 「～と思う。」に関する研究
 - 2.3 「思って」に関する研究
3. 研究の方法
4. 結果と考察
 - 4.1 「～と思って」の直前に現れる表現に関する考察
 - 4.2 中途文「～と思って。」の意味・機能と使用文脈に関する考察
 - 4.2.1 「依頼の表明」の意味・機能を果たす中途文「～と思って。」(タイプⅠ)
 - 4.2.2 「判断・態度の表明」の意味・機能を果たす中途文「～と思って。」(タイプⅡ)
 - 4.2.3 「不確定を含む判断の表明」の意味・機能を果たす中途文「～と思って。」(タイプⅢ)
 - 4.2.4 「意志・希望の表明(明示的)」の意味・機能を果たす中途文「～と思って。」(タイプⅣ)
 - 4.2.5 「意志・希望の表明(非明示的)」の意味・機能を果たす中途文「～と思って。」(タイプⅤ)
 - 4.2.6 「非難」の意味合いを併せ持つ中途文「～と思って。」
5. まとめと今後の課題

1. 研究の目的と研究の対象

本稿の目的は、中途終了型発話文「～と思って。」を研究対象とし、その引用部分の特徴を「～と思って」の直前に現れる表現の特徴から明らかにすること、及びこの中途終了型発話文の使用文脈の特徴を明らかにすることである。また、「～と思って」の直前に現れる表現との関連から、中途終了型発話文「～と思って。」の意味・機能についても見る。

中途終了型発話文には、述部が省略されるタイプ(「ご出身は。」など)と主節が省略されるタイプ(「まあ、行くけど。」など)の2種類がある(宇佐美 1995)とされる。後者は、形式上、主節が現れず、接続助詞(「けど」等)で終わるものである。本稿の考察対象とする中途終了型発話文(以下「中途文」とする)「～と思って。」は、接続助詞「て」で終わり、形式上主節が現れないもので、後者のタイプの1つである。なお、本稿では、「最近、これでいいのかなと思ってさ。」のように「～と思って」の後ろに終助詞が付されるものも考察範囲に含める。以下、本稿では、考察対象の当該部分に下線を付して示す。

張(2018)では、計31の接続助詞を対象に、それ

らを用いた中途文(1,454例)の出現状況を観察し、それらすべての接続助詞が中途文として現れるわけではないとしている。出現頻度が極めて高いものがある一方、出現頻度がゼロのものも見られるとし、この計31の接続助詞を用いた中途文を出現頻度の観点から、大きく3つのグループに分けている。そこでは、出現頻度が最も高いグループは、中途文「～から。」(「もう決めたから。」など)、中途文「～て。」(「それが欲しくて。」など)、中途文「～けど。」(「別にいいけど。」など)であったとしている¹⁾。このうち、中途文「～から。」と「～けど。」については、その意味・用法や談話展開機能など様々な観点からこれまで多くの分析が行われている²⁾。それに対し、中途文「～て。」に関する先行研究は少なく、白川(2009)しか挙げられない。白川(2009)では、中途文「～て。」には「事情の説明」と「感嘆」の2つの意味・機能があると指摘している。

本稿において、改めてデータ³⁾を観察したところ、この中途文「～て。」には、「～と思って。」、「～して。」、「～なって。」、「～あって。」、「～言われて。」など、ある特定の表現が繰り返し観察されることがわかった。その中で、中途文「～と思って。」は出現数も多く、

また、「と思って」の直前に現れる表現は、「かな」、「か」、「だろう」、「かもしれない」など不確定の要素を含む表現が多いという傾向も見られた。さらに、このような中途文「～と思って。」の後続文脈には、発話を受けた相手の否定的な態度を示す表現や、その驚き・意外感を表す表現が多いという傾向も見られた。本稿では、このように何らかの特徴を持つと考えられる中途文「～と思って。」を研究対象とし、「と思って」の直前に現れる表現の特徴、及びその使用文脈の特徴を考察する。また、「と思って」の直前に現れる表現との関連から、中途文「～と思って。」の意味・機能も見る。なお、本稿では、必要に応じて、複文「～と思って、…」との比較も含め、記述することとする。

2. 先行研究の検討と残された問題点

2.1 中途文「～て。」の意味・機能に関する研究

中途文「～て。」には、①事情の説明、②感嘆の2つの意味・機能がある（白川 2009：145-153）とされている。以下の例（1）は①事情の説明の例である。

- （1）響子：助かった。ひとりじゃとても運ばなくて。
（高橋留美子『めぞん一刻 Ⅰ』p. 177
白川（2009：145）（12）の一部）

例（1）は、話し手の響子の安堵の気持ちを述べたものであり、いかに自分が困っていたかという事情を説明している（白川 2009：146）とされる。

中途文「～と思って。」も、中途文「～て。」の1つの具体的な現れと考えられる形式であるため、中途文「～て。」において指摘される「事情の説明」という意味・機能は同様に持っているのではないかと考えられる。しかし、中途文「～と思って。」には、思考内容を表す「～と思う」という引用表現が用いられているため、「事情の説明」をしていると同時に、話し手の意思などを相手に表明するというような意味・機能も持つのではないかと考えられる。また、第1節におい

ても述べた通り、「と思って」の直前には不確定の要素を含む表現が多く現れる傾向が見られる。このことと、中途文「～と思って。」の意味・機能との関わりについて考えると、例えば、以下の例（2）の中途文「～と思って。」は、その直前に見られる「～かな」という不確定の要素を含む表現と関連し、話し手の「不確定を含む判断」を表明するという意味・機能を果たしているのではないかとと思われる。

- （2）美咲：ただいま。

葉月：何？これ！

美咲：解約通知…ああーああ、ああ。

葉月：「ああー、ああ、ああ」じゃないわよ。
どういうこと？

美咲：いや。色々考えたんだけど、ここで、2人で暮らしてくのって、やっぱ、狭いし、そもそも家賃もったいなくない？だから、2人で実家に帰らないかなと思って。

葉月：はあ？

美咲：だって、一駅、先ただけだし、何の問題もないでしょ？

葉月：絶対、いや！

美咲：何で？家賃が浮けば、その分、生活費や貯金に回せるんだよ。

葉月：嫌だってば。あんた、一人で帰ればいいでしょ。

美咲：それじゃ、意味ないの。

（テレビドラマ『ディア・シスター』第5回）

例（2）は、姉の葉月が、なぜマンションの解約通知書が届いたのかについて、妹の美咲に詰問している場面である。美咲は、姉葉月の借りたマンションで姉と一緒に暮らしている。賃貸期間が満了する日が近づき、通知書への返事を姉に黙ってこっそりと「契約の更新なし」と管理会社に返信した。姉が解約通知書を受け取って驚いた時のやり取りである。まず、中途文「だから、2人で実家に帰らないかなと思って。」は、なぜ解約通知書が届いたのかという姉の詰問に対し、

話し手の美咲が、事情を説明しているものと考えられる。話し手は、姉と一緒に実家に帰って暮らしたいため、今住んでいるマンションを解約しようとしていたのだということを姉に説明している。

また、話し手は、このマンションに姉と2人で暮らすのは、①狭い、②家賃がもったいないという2つの理由を挙げ、「今住んでいるマンションを解約して、2人で実家に帰る」という案を、この中途文「だから、2人で実家に帰らないかなと思って。」により、試みに提案としていと考えられる。しかし、マンションの契約者は話し手自身でないため、思った通りに進められるかどうかについては、話し手には、不確定なものとして捉えられている。話し手は、中途文「だから、2人で実家に帰らないかなと思って。」を用い、不確定であると捉えつつも、「マンションを解約し、2人で実家に帰ったほうが賢明だ」という自分の判断を相手の姉に表明しているのではないかと思われる。このように、例(2)の中途文「～と思って。」は、「事情の説明」という基本的な意味・機能を持つことを前提にしつつも、話し手の「不確定を含む判断の表明」という意味・機能も果たしていると言えるのではないだろうか。このように、中途文「～と思って。」の意味・機能は、「と思って」の直前に現れる表現、即ちその引用部分に見られる表現と関連があるのではないかと考えられる。「～と思って」の直前に現れる表現の全体像を見るとともに、それとの関連から、中途文「～と思って。」の意味・機能を考察する必要があると思われる。

さらに、例(2)の後続文脈の特徴を観察すると、相手の姉の「はあ?」、「絶対、いや!」、「嫌だってば。」、「あんた、一人で帰ればいいでしょ。」などの発話が見られる。これらの発話から、話し手の「実家に帰る」という案に対し、相手の姉は、異論を持っていることが窺える。このように聞き手の否定的な態度を示す表現が後続文脈に多く見られ、このことから、中途文「～と思って。」は、話し手の意思に対し、相手が異論を持つと予想される状況で使われやすいのではないだろうか。

一方、中途文「～て。」の②感嘆という意味・機能は、「陳謝」、「感謝」、「非難」、「感嘆(未分化)」⁴⁾の4つに分けられる(白川 2009:152-153)とされる。大堀(2002)においても、中途文「～て。」には、ある種の感嘆或いは予想以上の出来事という意味が付与される(大堀 2002:130)としている。本稿の考察データを観察すると、「遠藤さん、若ぶってないですか?年下だと思って。」(テレビドラマ『あばやん～走る国際空港』第3回)のように、「非難」を表すと考えられる例は確かに見られた。ここで、話し手は、相手の遠藤が自分のほうが年下だと思って若ぶっている様子に対し、中途文「年下だと思って。」を用いて「非難」を示している。ただし、中途文「～と思って。」に、ほかの「陳謝」、「感謝」、「感嘆(未分化)」の意味・機能を持つものがあるかどうかについては確認する必要がある。

また、中途文「～と思って。」の例を観察すると、「事情の説明」と「感嘆」という2つの意味・機能は、排他的にどちらか一方しか表せないのではなく、同時に表し得るものなのではないかと考えられる。例えば、「あー、遠藤さん、若ぶってないですか?年下だと思って。」という例の先行文脈を見ると、話し手の「寒くないですか」という質問に対し、相手の遠藤からは「全然、むしろ、ポ…ポカポカしてます」という返答が返ってきていることが見られる。ここでは、話し手が、中途文「年下だと思って。」を用い、相手がなぜ「全然寒くない」などと若ぶった返答をするのか、相手の遠藤の視点に立ってその理由を「自分のほうが年が下だと思っているから」とであると推測して説明していると同時に、相手がそのようにあえて若さを誇示する様子に非難を示していると考えられる。この点については、4.2.6節において記述する。

2.2 「～と思う。」に関する研究

先行研究では、「～と思う。」に関する記述は数多くあり、森山(1992)、小野(2005)、山岡(2011)、鈴木(2015)、日本記述文法研究会(2017)などが挙げ

られる。

「～と思う。」の意味・機能は、引用節の述語（「と思う」の直前に現れる表現）が断定形の時（「たしか、あのときは、鈴木もそこにいたと思います。」）と、断定形以外の判断形式や意志形（「そろそろ髪を切ろうと思う。」）が現れた時とでは異なる³（日本語記述文法研究会 2017：184）とされる。2.1 節において述べた通り、中途文「～と思って。」の場合も、「～と思う。」文と同じく、その意味・機能と、その直前に現れる表現とは関連があるように思われる。しかし、どのように関連しているのかを明らかにするためには、このように、直前に現れる要素が断定形か、断定形以外かという2つに分ける分け方では適当ではないと思われる。以下の例（3）、（4）、（5）において、それぞれの直前に現れる表現は断定形（「つながる」）、断定形以外の意志形（「付き合おう」）、断定形以外の命令形（「頑張れ」）である。

- （3）「僕は会社の利益にもつながると思って。」（ドラマ『あばやん～走る国際空港』第2回）
 （4）「俺は、真剣に、付き合おうと思って。」（ドラマ『ディア・シスター』第2回）
 （5）「頑張れと思って。」（『日本語日常会話コーパス』（モニター公開版）会話ID：K001_011）

例（3）は、中途文「～と思って。」により、引き受けた仕事を会社の利益につなげることができるという話し手の判断が表明されていると思われる。例（4）は、相手と真剣に付き合いたいという意味、例（5）は、話題の人のことを応援するという話し手の態度がそれぞれ表明されていると考えられる。このように、中途文「～と思って。」では、「～と思って」の直前に現れる表現が断定形か、断定形以外のものかということよりもむしろ、その表現の表す表現態度と関わり、それぞれ異なる意味・機能を果たすのではないだろうか。

中途文「～と思って。」の意味・機能を記述するに当たっては、「～と思って」の直前に現れる表現をその表現態度の観点から見てみるのが考えられるのでは

ないと思われる。

2.3 「思っ」に関する研究

先行研究では、「思っ」を対象とする考察は Shimotani and Endo (2014) しか挙げられない。ここでは、物語を語る連鎖（storytelling sequences）において使われる「思っ」（本稿における中途文「～と思って。」）を考察対象とし⁴、相互行為言語学の枠組みで考察を行っている。物語を語る連鎖とは、過去の出来事を思い出し、発話時において再現する発話の連鎖である。本稿では、このような連鎖において使われる中途文「～と思って。」だけでなく、全ての状況で使われる中途文「～と思って。」を考察対象とする。例えば、以下の例（6）は、発話時において、過去の出来事を思い出して再現するというものではない。

- （6）真理子：千春さん、千春さん、紅葉狩り、行かないんですか？

千 春：うん、ちょっとね。

真理子：何だ、千春さんが行きたいって言ったから、森田と企画しようと思ってたのに。

千 春：何か、老後のことを考えてさ、できるところから節約しなきゃと思って。

真理子：はっ？

千 春：明日から、お弁当にしようかな。

真理子：お弁当？

（テレビドラマ『結婚しない』第7回）

例（6）では、話し手の千春は、中途文「何か、老後のことを考えてさ、できるところから節約しなきゃと思って。」を用い、なぜ紅葉狩りに行かないのかについて説明している。同時に、この例（6）の中途文「～と思って。」は、老後のことを考え、できるところから節約しなければならないという話し手の考え・判断を表明していると思われる。また、文脈上、「明日から、お弁当にしようかな。」という発話からも、その発話

の連鎖が過去の出来事の再現ではないということがわかる。

また、Shimotani and Endo (2014) では、「思って」(同上) は、語りの組み立て方に応じ、①逐次的に緻密な状況描写をするもの (Sequitally-linking)、②遡及的に語られた内容に対して補足説明し、連鎖の軌道修正や調整を行うもの (Retroactively-linking) という2つのタイプに分けられるとしている。タイプ①のほうは、後続文脈の発展と直接に関わり、タイプ②のほうは、先行文脈の内容と直接に関わるか、或いは先行文脈と後続の発展のいずれとも関わるとしている。本稿も、中途文「～と思って。」の考察に当たっては、その前後の文脈との関わりを重視する。

以上の先行研究の検討を踏まえ、解決すべき課題として以下の2つが設定される。

- ① 中途文「～と思って。」には、「と思って」の直前に「かな」、「か」、「だろう」など不確定の要素を含む表現が多く見られる。これが、複文「～と思って、…」とは異なり、中途文「～と思って。」の特徴であるという点について確認する必要がある。また、後続文脈の特徴を観察することを通し、中途文「～と思って。」が、どのような状況で使われるか、その使用文脈の特徴を明らかにする必要がある。さらに、中途文「～と思って。」は、全て「事情の説明」を行っていると同時に、話し手の判断、意思などを表明するという意味・機能も持つのではないかと考えられる。その表明する内容の詳細について、「と思って」の直前に現れる表現の表現態度の観点から明らかにする。
- ② 中途文「～と思って。」には、中途文「～て。」において指摘されている「感嘆」という意味・機能のうち、「非難」という意味・機能は見られるが、ほかの「陳謝」、「感謝」、「感嘆(未分化)」が見られるかどうかを確認する必要がある。また、中途文「～と思って。」は、「事情の説明」

と「感嘆」という2つの意味・機能は、排他的にどちらか一方しか表せないのではなく、同時に表し得るものなのではないかという点を確認する必要がある。さらに、そのような意味・機能は、どのような場合に生じるのか、①において明らかにする中途文「～と思って。」の意味・機能との関連において明確に位置付ける必要がある。

3. 研究の方法

本稿では、データ収集の対象として、現代日本のテレビドラマ、『日本語日常会話コーパス(モニター公開版)』(以下 CEJC とする)⁷⁾、及び『現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版(BCCWJ-NT)』⁸⁾(以下 BCCWJ とする) という3種類を用いる。

テレビドラマには、多様な発話場面、及び発話者同士のバリエーションも極めて多くあり(張 2018: 5)、そこから得られたデータは、多様な文脈において中途文「～と思って。」の意味・機能を分析するという本稿の目的に適していると考えられる。本稿では、『日本人の知らない日本語』(2010年放送、全12話)、『結婚しない』(2012年放送、全11話)、『あばやん～走る国際空港』(2013年放送、全10話)、『ディア・シスター』(2014年放送、全10話)の4本のテレビドラマ⁹⁾から抽出したデータを用いた。また、「と思って」の直前に現れる表現、及び中途文「～と思って。」が果たす意味・機能を詳細に考察するにあたり、CEJC 及び BCCWJ から抽出したデータも取り入れ、データを補うこととした¹⁰⁾。

上記3種類のデータから、「～と思って。」、「～と思って(終助詞付き)。」、「～って思って。」、「～って思って(終助詞付き)。」、「～と思ひまして。」、「～と思ひまして(終助詞付き)。」という6つの形式¹¹⁾のものを抽出した。その結果、テレビドラマから計61例、CEJC から計291例、BCCWJ から計474例、合計826例の中途文「～と思って。」が抽出された。

4. 結果と考察

4.1 「とあって」の直前に現れる表現に関する考察

本稿では、まず、上記の計826例の中途文「～とあって。」について、「とあって」の直前に現れる表現

を表現態度の観点から分類した。その結果、以下の表1に示すような5つのタイプが得られた。なお、それぞれのタイプの表現の表現態度との関連¹²から、中途文「～とあって。」の意味・機能（表の右端の欄）をどのようにとらえることができるかについては、4.2節で詳述する。

表1 「とあって」の直前に現れる表現の出現傾向及び中途文「～とあって。」の意味・機能

タイプ	「とあって」の直前に現れる表現の例	表現態度	出現数（割合）					中途文「～とあって。」が果たす意味・機能
			ドラマ	CEJC	BCCWJ	合計	割合	
I	～てくれないか（な）	依 頼	3	0	6	9	1.09%	依頼の表明
	～てもらえないか（な）	依 頼						
	～てもらいたい	依 頼						
	～てほしい	依 頼						
II	～しなきゃ	必 要	10	78	117	205	24.82%	判断・態度の表明
	～なくてもいい	不必要						
	～といけない／ちゃいけない	非許容						
	～ば（いい）	必 要						
	～ほうが（いい）	必 要						
	～のだ／んだ	説 明						
	～ものだ	説 明						
	断定形（～だ、ない、美味しい、つながる、役立つ、など）	断 定						
	～わ	伝 達						
	～よ	伝 達						
	～や							
	～し、～から、～けど、～のに							
	それじゃあ、あんまり、だけでは、ちきしょう、何でもかんでも、頑張れ、ていて、兼ね							
III	～かな	疑 問	31	193	236	460	55.69%	不確定を含む判断の表明
	～な（あ）	伝達（確認を求める）						
	～か／かしら	疑 問						
	～じゃないか	疑 問						
	～のでは／のではないか／んじゃないか	推 量						
	～だろうか	疑 問						
	～かどうか	疑 問						
	～かも／かもしれない	蓋然性						
	～だろう／でしょう／まい	推 量						
	もしかしたら	蓋然性						
	ひょっとして	蓋然性						
	～つけ	伝達（確認を求める）						
	～ね／よね	伝達（確認を求める）						
	～かよ							
	～よな							
	～ぐらい、でも							
	あー、あらー、あれ、あれっ、ほー、まじで							
IV	～たい	希 望	14	20	108	142	17.19%	意志・希望の表明（明示的）
	～（よ）う	意 志						
V	～を（研究室におけるものを、できることから節約を、俳句ぐらい楽しいのを、など）	意志・希望	3	0	7	10	1.21%	意志・希望の表明（非明示的）
総 計			61	291	474	826	100.00%	

表1において、タイプⅠ～タイプⅣの「表現態度」は、基本的に日本語記述文法研究会(2017)に基づき、記述したものである。まず、タイプⅠとタイプⅣのものは、表現態度から見れば、明らかにそれぞれ「依頼」と「意志・希望」を表すものであり、それぞれ1つのグループとしてまとめた。次に、タイプⅢのものについては、表現態度の観点から見ると、「疑問」、「蓋然性」、「推量」など、「不確定」の要素を含むものが多く、1つのグループに整理した。また、タイプⅤの「表現態度」については、杉村(2002:245-248)に基づき記述したものである。杉村(2002)では、タイプⅤのものと類似している「～に～を」構文を、「発生構文」に共通する意味特徴を持ち、勧誘、意志、希望、命令、依頼のモダリティを伴って解釈され、述語がなくても必要な情報が伝達できるもの(「子供たちに、きれいな地球を(残そう／あげよう／与えよう)」名古屋市交通局協力会 杉村2002:246(21)など)としている。本稿でも、タイプⅤの「～を」表現は、この「～に～を」構文と同じく、格助詞「を」の後ろに述語がなくても、文脈において必要な情報が伝達でき、話し手の「意志・希望」を表すものとする。例えば「研究室におけるものを。」であれば、文脈に応じて、それは「研究室におけるものを探そう／買いたい」というような「意志・希望」の表現態度を表すことができると考える。したがって、このタイプⅤは、その表す表現態度は、タイプⅣと同様であると考えられるが、形式上において明確に異なる特徴があるため、1つのグループとして分けた。最後に、そのほか、「必要」、「非

許可」、「説明」などの表現態度を表すものは、1つのグループ(タイプⅡ)としてまとめた。断定の表現態度を表す断定形のものもタイプⅡに含めた。なお、「表現態度」に斜線が引いてあるところは、日本語記述文法研究会(2017)において記述されていないものであり、実際のデータに沿って筆者の判断によりそれぞれのグループに入れることとした。

それぞれの出現数(割合)を見ると、タイプⅢが半数以上(55.69%)を占め、出現率が最も高いということがわかった。次に、タイプⅡとタイプⅣが、それぞれ24.82%と17.19%を占めることがわかった。タイプⅤとタイプⅠは出現率が極めて低く、それぞれ1.21%と1.09%である。また、テレビドラマ、CEJC、及びBCCWJという3種類のデータ収集対象において、5つのタイプの表現の出現傾向は同様であった。

上述のように、中途文「～と思って。」において、「～と思って」の直前に現れる各タイプの表現の出現傾向が異なり、不確定の要素を含むタイプⅢの出現率が最も高いという特徴が見られる。また、この特徴は、複文「～と思って、…。」と異なり、中途文「～と思って。」に見られる独自の特徴であると考えられる。本稿で使用したデータからは、複文「～と思って、…。」については、4本のテレビドラマから25例、CEJCから112例、及びBCCWJから1421例の計1,558例が抽出された。この1,558例の複文「～と思って、…。」を用い、本稿において抽出した826例の中途文「～と思って。」と比較した結果を、以下の表2に整理した。なお、網かけ部分は、それぞれにおいて出現比率が最も高いタ

表2 中途文「～と思って。」と複文「～と思って、…。」を標本とするZ検定の結果
(「～と思って」の直前に現れる表現の出現傾向の相違)

直前に現れる表現のタイプ	中途文「～と思って。」の出現数	出現比率(中途文)	複文「～と思って、…。」の出現数	出現比率(複文)	プールした標本比率p	z検定統計量	5%有意水準
I	9	0.0109	6	0.0039	0.006	2.070	有意に異なる
II	205	0.2482	764	0.4904	0.406	-11.456	有意に異なる
III	460	0.5569	486	0.3119	0.397	11.633	有意に異なる
IV	142	0.1719	299	0.1919	0.185	-1.197	差がない
V	10	0.0121	3	0.0019	0.005	3.212	有意に異なる
総計	826	1.0000	1558	1.0000			

イブを示している。

表2に示しているように、Z検定¹³を通し、中途文「～と思って。」と複文「～と思って、…。」において、「～と思って」の直前に現れる各タイプの表現の出現傾向には違いが見られることがわかった¹⁴。複文「～と思って、…。」においては、「～と思って」の直前に、「断定形」、「～のだ」などのような判断を表すタイプⅡの表現が現れやすいのに対して、中途文「～と思って。」においては、「～と思って」の直前に、「かな」、「か」、「かもしれない」、「だろう」などのような不確定の要素を含むタイプⅢの表現が現れやすいという異なる傾向が見られる。タイプⅣのみは出現傾向が同じであることがわかった。

また、これらの「～と思って」の直前に現れる表現との関連から、中途文「～と思って。」は、「依頼の表明」、「判断・態度の表明」、「不確定を含む判断の表明」、「意志・希望の表明（明示的）」、「意志・希望の表明（非明示的）」という5つの意味・機能を果たすと考えられる。それぞれについては、4.2節において詳しく述べる。

4.2 中途文「～と思って。」の意味・機能と使用文脈に関する考察

本節では、「～と思って」の直前に現れる表現の表現態度との関連から、中途文「～と思って。」が果たす意味・機能を見る。また、中途文「～と思って。」の後続文脈を観察することを通し、その使用文脈の特徴を明らかにする。

中途文「～と思って。」は、中途文「～て。」と同様に「事情の説明」という意味・機能を持つ。それと同時に、「～と思う」という引用表現が用いられているため、話し手の意思、判断などを相手に表明するという意味・機能も果たしていると思われる。この話し手の意思などの内容の詳細は、「～と思って」の直前に現れる表現の表現態度との関連から、「依頼の表明」、「判断・態度の表明」、「不確定を含む判断の表明」、「意志・希望の表明（明示的）」、「意志・希望の表明（非明示的）」

という5つのものがあると考えられる。

また、後続文脈の特徴を観察すると、「意志・希望（非明示的）」（タイプⅤ）を表す中途文「～と思って。」を除き、ほかのタイプの中途文「～と思って。」全てが、相手との間に情報量による認識のギャップがあると予想される場合、或いは、相手が否定的な態度をとる可能性が高いと予想される場合に使われやすいという使用文脈の特徴があることがわかった。「意志・希望（非明示的）」（タイプⅤ）については、例外的に、その後続文脈には、話を受けた相手の積極的な評価を表す表現が多いということがわかった。

さらに、中途文「～と思って。」の場合、先行研究において指摘されている「事情の説明」と「非難」という2つの意味・機能は、排他的にどちらか一方しか表せないのではなく、同時に表し得るものであると思われる。「判断・態度の表明」（タイプⅡ）、及び「意志・希望の表明（明示的）」（タイプⅣ）の意味・機能を果たす中途文「～と思って。」のうち、「思う」の主体が相手である場合のものが、それに当たるとことがわかった。

以下、タイプごとに中途文「～と思って。」の意味・機能、及び使用文脈の特徴を記述する。

4.2.1 「依頼の表明」の意味・機能を果たす中途文「～と思って。」（タイプⅠ）

このタイプの中途文「～と思って。」は、「～と思って」の直前に現れる「～てもらえないか（な）」などの表現が持つ依頼の表現態度と関連し、「事情の説明」を行うと同時に、話し手の「依頼」という意思に焦点が当てられ、それを相手に表明している。また、文脈上、依頼の話を受けた相手の否定的な態度を表す表現が現れやすく、このタイプの中途文「～と思って。」は、相手が否定的な態度をとる可能性が高いと予想される場合に使われやすいという使用文脈の特徴があることがわかった。

(7) 白石：どうしたんだよ？急に、電話なんかしてきて。

永人：いやあ、実は、仕事、探してんだ。

白石：どんな？

永人：何でもやるから。口利いてもらえないかなと思って。

白石：今、何やってんだ？フリーター？

永人：まあ…

白石：厳しいこと言うけど、新卒でも就職あぶれちゃう時代だからさ。大学出て、何年もふらふらしてたやつに、じゃあ、どうぞって、仕事くれる企業はなかなかないと思うぞ。

白石：まあ、聞くだけ聞いてみるけど、あんま、期待すんな。

(テレビドラマ『ディア・シスター』第6回)

例(7)は、話し手の永人が大学時代の友人の白石に就職のことについて頼んでいる場面である。中途文「口利いてもらえないかなと思って。」は、話し手の永人が、自分が友人の白石に電話して会いに来た理由について説明しているものである。話し手は、「今、仕事を探している」という自分の状況を背景として相手に提示し、「何でもやるから。」とどのような仕事でも受け入れるという仕事探しの条件を明示している。そして、中途文「口利いてもらえないかなと思って。」により、「仕事を紹介してくれないか」という話し手の「依頼」の意思を相手に表明していると考えられる。ここで話し手は、直接に「口利いてもらえないか」という依頼文を使用せず、中途文「口利いてもらえないかなと思って。」を用い、「仕事探しのことについて頼みたい」という話し手の意図を相手に間接的な形で示していると思われる。その後、相手の「今、何やってんだ？フリーター？」と確認する発話が見られ、仕事を見つけるのはそう簡単ではないという考えも述べられており、相手がこの依頼の件を受け止めて話が進められていることがわかる。このように、この例(7)では、話し手が実際に「依頼」の発話を行っているの

ではないが、前後の文脈から見れば、中途文「～と思って。」から相手が確実にその「依頼」の意思を受け止めたことがわかる。話し手は、中途文「～と思って。」によって「依頼」の意思を相手に表明しているものと考えられる。

また、例(7)の後続文脈を観察すると、「厳しいこと言うけど」、「じゃあ、どうぞって、仕事くれる企業はなかなかないと思うぞ」、「あんま、期待すんな」などの発話が見られ、相手の白石は、その依頼を受けるかについては、やや否定的な態度を持つと言える。このタイプの中途文「～と思って。」の後続文脈において、相手が依頼を受けるかについては、3例のうち2例は、やや否定的な態度を表す表現が文脈において示されていることが観察された。この後続文脈の特徴から、このタイプの中途文「～と思って。」は、相手が否定的な態度をとる可能性が高いと予想される場合に使われやすいという使用文脈の特徴が見られる¹⁵と言えるのではないと思われる。

4.2.2 「判断・態度の表明」の意味・機能を果たす中途文「～と思って。」(タイプⅡ)

このタイプの中途文「～と思って。」も、「事情の説明」という意味・機能を果たしている。同時に、「～と思って」の直前に現れる表現の「必要」、「不必要」、「非許容」、「説明」、「断定」、「伝達」などの表現態度と関連し、中途文「～と思って。」は、話し手の何らかの「判断・態度」に焦点が当てられ、それを相手に表明する意味・機能も果たしている。また、後続文脈には、相手の驚き・意外感を表す表現、或いは、話し手の判断・態度に対し、異論を示す表現が多いという傾向が見られ、このタイプの中途文「～と思って。」は、相手との間に情報量による認識のギャップがあると予想される場合、或いは、相手が否定的な態度をとる可能性が高いと予想される場合に使われやすいという使用文脈の特徴があることがわかった。

(8) 千春：ご宿泊も、2名さまでよろしいですか？

河野：はい。実は、工藤先輩なんです。一緒に行くの。

千春：えっ？

河野：何とか、向こうでチャンスをつかんでほしくて、やっぱり、先輩は、絵で生きていく人だと思うから。

千春：そうですか。

河野：知り合いの画廊を紹介してもらって、売り込もうと思ってるんです。そのためには、パリに拠点を置いたほうがいいと思って。

千春：あっ…向こうで暮らすということですか？

河野：フッ、はい。でも、まだ行くっていう返事はもらえてないんです。でも、先輩を信じて、予約を。

(テレビドラマ『結婚しない』第7回)

例(8)では、中途文「そのためには、パリに拠点を置いたほうがいいと思って。」を用い、話し手がなぜ2名分のパリへの航空券や宿泊を予約するのかについて事情を相手(千春：旅行会社社員)に説明している。また、「何とか、向こうでチャンスをつかんでほしくて、やっぱり、先輩は、絵で生きていく人だと思うから。」「知り合いの画廊を紹介してもらって、売り込もうと思ってるんです。」の発話から、「先輩」という人にパリでチャンスをつかんでほしいという希望、パリの画廊に絵を売り込もうという目論みを持っているということが読み取れる。この計画を実現するためには「パリに拠点を置くほうがいい」とした話し手の「判断」が、中途文「そのためには、パリに拠点を置いたほうがいいと思って。」により、表明されている。

また、後続文脈には、「あっ…向こうで暮らすということですか？」という相手の驚いた反応が見られる。相手の千春は、パリへの旅行の手配と考えて対応していたが、事情を聞いてみると、旅行というより、そこ

に拠点を置き、暮らそうとするということであった。話し手の河野と「先輩」という人物との間の関係の深まりについて何も知らなかった千春にとっては、この展開は、予想していなかったものと考えられる。

また、このタイプの中途文「～と思って。」の後続文脈の中では、以下の例(9)のように、話し手の「判断・態度」に対し、異論を示す表現も見られる。

(9) 遠 藤：あの、それなら、僕ですけど。

堀之内：おい、豆。これはな、俺が一度断ったやつだ。

遠 藤：ええ？

篠 田：ハニーハート…。

篠 田：あの芸能プロダクション？

馬 場：以前、堀之内さんがツアーじゃないのにセンディング頼まれて、散々、無理言われたんです。

遠 藤：でも、見送りだけって約束ですし。僕は会社の利益にもつながると思って。

堀之内：それで万が一、ツアーのお客様を出発させられなかったら、俺達が空港にいる意味ねえだろ。スーパーバイザーにもなってねえ、半人前がな、大口たたくな！

(テレビドラマ『あぼやん～走る国際空港』第2回)

例(9)は、中途文「僕は会社の利益にもつながると思って。」を用い、話し手がなぜこの仕事を引き受けたのかについて相手に説明すると同時に、この中途文により、その仕事が会社に利益をもたらすことができると考えたという話し手の「判断」を相手に表明している。この話を受けた相手は、「それで万が一、ツアーのお客様を出発させられなかったら、俺達が空港にいる意味ねえだろ。」と発話しており、遠藤が引き受けた仕事が、本来の仕事に支障をきたす恐れがあるという異論を示していると考えられる。

このように、このタイプの中途文「～と思って。」の後続文脈を観察した結果、例(8)のような相手の

驚き・意外感を表す表現、或いは、例(9)のような話し手の「判断」に対し、異論を示す表現が極めて多いという傾向が見られ、このタイプの中途文「～と思って。」は、相手との間に情報量による認識のギャップがあると予想される場合、或いは、相手が否定的な態度をとる可能性が高いと予想される場合に使われやすいという使用文脈の特徴があることがわかった。

4.2.3 「不確定を含む判断の表明」の意味・機能を果たす中途文「～と思って。」(タイプⅢ)

このタイプの中途文「～と思って。」は、3種のデータの合計数は460例と、全体の半数以上(55.69%)を占め、最も多いという複文「～と思って、…。」とは異なる出現傾向が見られた。この種類の中途文「～と思って。」も、「事情の説明」を行うと同時に、「かな」、「かもしれない」、「だろう」など「～と思って」の直前に現れる表現の表現態度と関連し、話し手の「不確定を含む判断」に焦点が当てられ、それを表明していると考えられる。また、後続文脈には、話し手の「判断」に対し、異論を示す表現、或いは、相手の驚き・意外感を表す表現が多く、このタイプの中途文「～と思って。」も、相手が否定的な態度をとる可能性が高いと予想される場合、或いは、相手との間に情報量による認識のギャップがあると予想される場合に使われやすいという使用文脈の特徴があることがわかった。

- (10) 高原：あのさ、話があるんだ。
 千春：話？うん？高原さん？
 高原：中途半端な気持ちじゃないって言ったの、覚えてるかな？
 千春：あっ、はい。
 高原：結婚してください！
 千春：いや、でも、あのう、私、35なんです。
 高原：知ってるよ。それが、どうかした？
 千春：だから、色々、結婚の条件とかに、合わないんじゃないかなと思って。

高原：俺の条件は俺がこの人ならって、思うことだけだよ。

千春：でも、そのう、子どもとか…たくさんは、難しいかも…

高原：何、言ってるの？今は、医学も進んでるし、50代で産んだ人だって、いるんだよ。

(テレビドラマ『結婚しない』第10回)

例(10)は、話し手の千春が、恋人の高原からのプロポーズに対して返答を迷う場面である。話し手の千春は、中途文「だから、色々、結婚の条件とかに、合わないんじゃないかなと思って。」によって、相手のプロポーズに対して「いや、でも、あのう」と言いよどみ、明確に返事をしなかった理由について説明している。同時に、この中途文「～と思って。」により、自分が一般的な「結婚の条件とかに合わないのではないかな」という「判断」が表明されている。前後の文脈を観察すると、「私、35なんです。」「子どもとか…たくさんは、難しいかも…」という発話が見られ、これらは全て話し手の「判断」を支える理由であると考えられる。

この例(10)の中途文には、「かな」という「疑問」の表現態度を表す要素が見られる。「かな」は、疑いの疑問文において使われるものであり、話し手にとって不明の点があることを表し、判断不明、思考過程、疑念の3つの用法がある(日本語記述文法研究会2017:34-37)とされるものである。ここでは、話し手が自分が結婚の条件に合わない1つの理由として「私、35なんです。」と年齢のことを挙げているが、それに対して、相手からは「知ってるよ。それが、どうかした？」という返答が返ってきている。プロポーズをしてきたということは、相手の考えている結婚の条件は話し手が考えるものとは異なっていることが考えられる。結婚の条件を決め、それに「合わない」のであるかどうかの最終判断を行うのは話し手でなく、相手の高原である。したがって、「自分は、結婚の条件に合わない」という話し手自身の「判断」が、相手

の高原から見れば正しいかどうかは、話し手には確定できないものであると言えるだろう。

このほかにも、「～と思って」の直前には、疑問を表す「か」（「どんな人かと思って。」『CEJC』会話ID：T013_009）、推量を表す「だろう」（「妊娠中なのに、何、考えてるんだろうと思って。」（テレビドラマ『ディア・シスター』第8回））、蓋然性を表す「かもしれない」（「ちょっとするかもって思って。」（テレビドラマ『ディア・シスター』第8回））などの不確定の要素を表す表現が見られる。これらの表現が表す表現態度と関連することによって、このタイプの中途文「～と思って。」は、「不確定を含む判断の表明」の意味・機能を持つようになると思われる。

さらに、その後続文脈を観察すると、相手の高原が、「俺の条件は俺がこの人ならって、思うことだけだよ。」という発話が見られ、相手の高原は、世の中で暗黙のうちに認められている結婚の条件と関係なく、自分が好きな人と結婚したいということを明示している。これは、話し手の「判断」に対し、異論を示すものであると考えられる。このタイプの中途文「～と思って。」の後続文脈を観察すると、例（10）のような話し手の「判断」に対し、異論を示す表現、或いは、「はあ?」、「珍しい!」、「へー! なにそれ!」などのような相手の驚き・意外感を表す表現が多いという傾向が見られ、このタイプの中途文「～と思って。」も、タイプⅡと同様、相手が否定的な態度をとる可能性が高いと予想される場合、或いは、相手との間に情報量による認識のギャップがあると予想される場合に使われやすいという使用文脈の特徴があることがわかった。

4.2.4 「意志・希望の表明（明示的）」の意味・機能を果たす中途文「～と思って。」（タイプⅣ）

このタイプの中途文「～と思って。」は、「事情の説明」という意味・機能を行いつつ、その直前に現れる「～たい」、「～（よ）う」などの表現の表現態度と関

連し、話し手のやろうとすること、及び希望することなどの話し手の「意志・希望」が、中途文「～と思って。」により、表明されている。また、その後続文脈には、話し手の「意志・希望」に対し、話を受けた相手の驚き・意外感を表す表現、或いは、消極的な反応を示す表現が極めて多いという傾向が見られ、このタイプの中途文「～と思って。」も、相手との間に情報量による認識のギャップがあると予想される場合、或いは、相手が否定的な態度をとる可能性が高いと予想される場合に使われやすいという使用文脈の特徴があることがわかった。

（11） 春子：あのう、ご愁傷さまでした。

谷川：僕は何にも親孝行できなかったから、
せめてこの家から送り出してやろうと
思いましたね。

春子：そうですか。

谷川：祭壇を飾ってやろうと思ひまして。

春子：ポインセチアで?

谷川：吊いの花に赤いポインセチアは、いさ
さか常識外れだとは承知していま
すが、遺言が出てきましてね。

春子：遺言?

谷川：ポインセチアの花で送ってほしい。父
親がプロポーズしたときにくれた花だ
からと。

（テレビドラマ『結婚しない』第9回）

例（11）は、花屋の店長の春子が、話し手の谷川にポインセチアの花を届けに来た場面である。話し手の谷川は、中途文「祭壇を飾ってやろうと思ひまして。」を用い、なぜ自分がポインセチアの花の配達を注文したのかについて説明している。また、文脈上、「僕は何にも親孝行できなかったから、せめてこの家から送り出してやろうと思ひましてね。」という発話から、今まで親孝行できなかった話し手が、最後ぐらい母を実家からちゃんと送り出したいと考えていることが読み取れる。これを実現するには、自宅に祭壇を設置す

る必要があり、中途文「祭壇を飾ってやろうと思って。」により、話し手の「花できれいに祭壇を飾ってやろう」という「意志」が表明されている。

また、その後続文脈を見ると、ポインセチアという花は通常弔いの花として使われることはないため、相手が驚いたと考えられ、「ポインセチア？」という驚き・意外感を表す表現が見られる。

さらに、このタイプの中途文「～と思って。」の後続文脈の中では、以下の例(12)における「悪いけど、私はそんな気ないから。」などのように、話し手の「希望」に対し、消極的な反応を示す表現も多い。

- (12) 美 咲：もう、私にかかわらないで。
 宗一郎：どうしてそう言うんだよ？
 美 咲：あんたには、関係ないからだよ。何が言いたい？ 1回、寝ただけじゃない。
 宗一郎：何で、そんなこと言うんだ？ 俺は、真剣に、付き合おうと思って。
 美 咲：悪いけど、私はそんな気ないから。
 とにかく。忘れて。
 宗一郎：俺は、お前のことが好きだ。
 (テレビドラマ『ディア・シスター』第2回)

例(12)は、中途文「俺は、真剣に、付き合おうと思って。」を用い、話し手の宗一郎は、相手の美咲に会いに来た理由について説明しつつ、相手と真剣に付き合おうと考えているという「希望すること」を表明している。この話し手の「希望」に対し、相手は「悪いけど、私はそんな気ないから。」と返事しており、話し手の「希望」を受け止めるつもりがないことを示している。このほか、「その前に、君自身の感触を知りたいと思って。」(テレビドラマ『結婚しない』第8回)という話し手の希望に対し、「少し考えさせてください。」というように、相手の希望することに対して応えていない表現も見られる。このように、話し手の希望することを受け止めるつもりがないか、話し手の希望することに対して応えないというように、話し手の「希望」に

対し、消極的な反応を示す表現が多く見られる。

このように、このタイプの中途文「～と思って。」の後続文脈を観察した結果、例(11)のような話を受けた相手の驚き・意外感を表す表現、或いは、例(12)のような話し手の「希望」に対し、消極的な反応を示す表現が極めて多いという傾向が見られ、このタイプの中途文「～と思って。」も、相手との間に情報量による認識のギャップがあると予想される場合、或いは、相手が否定的な態度をとる可能性が高いと予想される場合に使われやすいという使用文脈の特徴があることがわかった。

4.2.5 「意志・希望の表明(非明示的)」の意味・機能を果たす中途文「～と思って。」(タイプV)

このタイプの中途文「～と思って。」は、基本的に4.2.4節において記述したものと同様の意味・機能を果たしていると思われる。ただ、「～と思って」の直前に、明示的に希望や意志を表す「～たい」や意志形などの表現は現れない。また、後続文脈の特徴を観察すると、ほかの4つのタイプのものと異なり、話を受けた相手の積極的な評価を表す表現が多いということがわかった。

- (13) 春子：いらっしゃいませ。
 谷川：どうも。今日は、研究室に置けるものをと思っましてね。
 春子：研究室に？
 谷川：ええ。
 春子：それは素敵な思いつきですね。でしたら、観葉植物なんていかがでしょう？
 (テレビドラマ『結婚しない』第6回)

例(13)は、話し手の谷川と花屋の店長の春子とのやり取りである。話し手の谷川が、中途文「今日は、研究室に置けるものをと思っましてね。」を用い、花屋に来た目的について説明している。このタイプの中

途文「～と思って。」では、「～たい」のような自分の希望を直接的に表す表現は見られず、例(13)のように、自分の「意志・希望」は非明示的な形で表明されている。この中途文においては、まず、研究室に置くものを買いたいという希望を相手に伝えるという情報伝達の機能が働き、さらに、何か適切なものを選んでもらいたく、相手の意見やアドバイスなどを期待するという情報要求の機能も働いていると考えられる。

さらに、ほかの4つのタイプとは異なり、「研究室に？」と確認した後、「それは素敵な思いつきですね。」という発話が見られ、相手からの肯定的な評価が示されていると考えられる。また、その後の「でしたら、観葉植物なんかいかがでしょう？」という発話は、相手からのアドバイスであると考えられる。これは話し手の情報要求の期待に応えた返事であると考えられる。後続文脈を観察できた3例全てのこのタイプの中途文「～と思って。」に、このような積極的な評価を表す表現が見られた。

4.2.6 「非難」の意味合いを併せ持つ 中途文「～と思って。」

中途文「～と思って。」には、中途文「～て。」に指摘されている「感嘆」という意味・機能のうち、「陳謝」、「感謝」、「感嘆（未分化）」の意味・機能を持つものは見られず、「非難」を表すものが2例見られた。考察した結果、これらの「非難」を表す中途文も「事情の説明」という意味・機能を持つことは同様ではないかと考えられることがわかった。この場合、話し手が、相手の視点に立ち、相手の発話や行動について説明を加えていると思われる。すなわち、中途文「～と思って。」の持つ「事情の説明」という意味・機能は、話し手自身の発話や行動に限らず、文脈上にある何らかの事柄の事情について、話し手が説明しているというものであると考えられる。さらに、「判断・態度の表明」(タイプⅡ)、及び「意志・希望の表明（明示的）」(タイプⅣ)の意味・機能を果たす中途文「～と思って。」のうち、「思う」の主体が相手である場合に、このよ

うな「非難」の意味合いが込められるということがわかった。例えば、以下の例(14)のようなものである。

- (14) 遠 藤：一番おっきいジョッキ3杯。
古 賀：えっ。
マスター：かしこまりました。
古 賀：寒くないですか？
遠 藤：全然、むしろ、ポ…ポカポカしてます。
古 賀：あー、遠藤さん、若ぶってないですか？年下だと思って。
遠 藤：いや、全然。
古 賀：お疲れさまでした！
遠 藤：お疲れさまでした！

(テレビドラマ『あばやん～走る国際空港』第3回)

例(14)は、話し手の古賀は寒いと感じているのに、相手の遠藤が冷たいビールを一番大きいジョッキで3杯頼んだという場面である。話し手の「寒くないですか？」という質問に対し、相手の遠藤からは「全然寒くない、むしろ、ポカポカしてます」という返答が返ってきていることが見られる。話し手の古賀は、相手の遠藤がなぜそのように若ぶって返答しているのか、中途文「～と思って。」により、相手の遠藤の視点に立ってその理由を「自分のほうが年下だと思っているから」と推測して説明していると思われる。同時に、古賀は、この中途文「年下だと思って。」により、相手の遠藤が、実際には両者の間にはそれほど年齢差がないのに、「全然寒くない」などと言って自分のほんの少しの若さを誇示していると考えられる様子に対し、「非難」を示していると言えるだろう。

また、本稿において抽出された2例は、例(14)を含め、いずれも「判断・態度の表明」(タイプⅡ)のものであったが、このほか、「意志・希望の表明（明示的）」(タイプⅣ)の場合にも、「非難」の意味・機能を表現し得ると思われる。例えば、以下の例(15)は、このような例である。

- (15) (五代が二階の窓から飛び降りようとしている。四谷と朱美が、止めている)

五 代：はなせーっ、飛びおりて死んでやるーっ！！

四 谷：落ち着きなさいよ、五代くん。

朱 美：模試に遅刻したくらいでなによ。

(一の瀬が、二階の他の窓から、この様子を見て)

一の瀬：どうせ飛びおりるならビルの屋上から飛ばんかい。同情ひこうと思っ
て！！

(高橋留美子『めぞん一刻 ①』p. 22
白川 (2009: 150-151) (24))

例 (15) は、話し手の一の瀬は、中途文「同情ひこうと思って！！」を用い、五代がなぜ二階の窓から飛び降りようとするふりをしているのか、五代の視点から見て推測したその理由を暴くかのように説明している。それと同時に、中途文「～と思って。」により、相手の五代が同情を引こうと思って大げさなことを言って騒いでいると考えられる様子に対し、「非難」の気持ちを表明している。

先行研究でも、「非難」を表す中途文「～て。」については、テ形節で表された行為の行為者は聞き手である (白川 2009: 151) とされている。中途文「～と思って。」の場合も、「思う」の主体が話し手ではなく、発話を受けた相手である時、「非難」の意味が表されるということがわかった。この「非難」の意味を表す中途文「～と思って。」において、「と思う」の主体が相手であることは、その「事情の説明」という意味・機能のあり方がほかとは異なり、話し手が相手の視点に立って推測するものとなっていることと一致している。

5. まとめと今後の課題

本稿では、中途文「～て。」の1つの具体的な現れと考えられる中途文「～と思って。」を研究対象とし、

「～と思って」の直前に現れる表現、及び中途文「～と思って。」の使用文脈の特徴を考察した。「～と思って」の直前に現れる表現を表現態度の観点から分類した結果、5つのタイプが得られた。中途文「～と思って。」は、複文「～と思って、…。」と異なり、「～と思って」の直前に現れる表現については、タイプⅣ (「意志・希望の表明 (明示的)») を除き、ほかの全てのタイプの表現の出現傾向には違いが見られることがわかった。特に、複文「～と思って、…。」と比較することを通し、中途文「～と思って。」には、「かな」、「だろう」、「かもしれない」などのような不確定の要素を含む表現 (タイプⅢ) が「～と思って」の直前に多く現れるという独自の特徴があるということがわかった。

また、中途文「～と思って。」は、中途文「～て。」と同様に、「事情の説明」を行っていると同時に、話し手の判断、態度などを表明する意味・機能も果たしていると思われる。その表明する内容については、上記の「～と思って」の直前に現れる表現をその表現態度の観点から分類したタイプとの関連から、「依頼の表明」 (タイプⅠ)、「判断・態度の表明」 (タイプⅡ)、「不確定を含む判断の表明」 (タイプⅢ)、「意志・希望の表明 (明示的)」 (タイプⅣ)、「意志・希望の表明 (非明示的)」 (タイプⅤ) という5つに分けられることがわかった。

一方、中途文「～と思って。」には、中途文「～て。」に指摘されている「感嘆」という意味・機能のうち、「陳謝」、「感謝」、「感嘆 (未分化)」の意味・機能を持つものは見られず、「非難」を表すものしか見られなかった。また、中途文「～と思って。」の場合、「事情の説明」と「非難」という2つの意味・機能は、そのうちどちらか一方しか表せないのではなく、同時に表し得るものであるということがわかった。上述の5つのタイプの中で、「判断・態度の表明」 (タイプⅡ) 、及び「意志・希望の表明 (明示的)」 (タイプⅣ) の意味・機能を果たす中途文「～と思って。」のうち、「思う」の主体が相手である場合に、「非難」の意味も同時に表されるということがわかった。

さらに、中途文「～と思って。」の後続文脈を観察

した結果、「意志・希望の表明（非明示的）」（タイプⅤ）を表すものだけは例外であり、後続文脈には積極的な評価を表す表現が続くが、そのほかのタイプのものは、話を受けた相手の驚き・意外感を表す表現、或いは話を受けた相手の否定的な態度を示す表現が現れやすいという傾向が見られた。このような否定的な態度を示す表現には、①「依頼」に対する拒否するような表現（タイプⅠ）、②話し手の「判断・態度」に対し、異論を示す表現（タイプⅡ、Ⅲ）、③話し手の「意志・希望」に対し、消極的な反応を示す表現（タイプⅣ）という3つのものが含まれる。この後続文脈の特徴から、中途文「～と思って。」は、相手との間に情報量による認識のギャップがあると予想される場合、或いは、相手が否定的な態度をとる可能性が高いと予想される場合に使われやすいという使用文脈の特徴があることがわかった。

先行研究では、中途文「～て。」には、①事情の説明、②感嘆の2つの意味・機能がある（白川 2009：

145-153）とされるが、上述した通り、中途文「～て。」の1つの具体的な現れと考えられる中途文「～と思って。」については、この2つの意味・機能は、どちらか一方しか表せないのではなく、同時に表し得るものであるということがわかった。ただし、「非難」の意味を表す場合の「事情の説明」のあり方はほかとは異なり、話し手が相手の視点に立って相手の考えを推測し、何らかの事情について説明を加えているものとなっている。すなわち、「事情の説明」とは、話し手自身の発話や行動に限らず、文脈上にある何らかの事柄の事情について、話し手が説明するものであり、この「事情の説明」が、中途文「～と思って。」の基本的な意味・機能と考えられることがわかった。このことは、「～と思って。」、「～して。」、「～言われて。」などを含め、中途文「～て。」の全体においても言えるかどうか、その点を明らかにすることについては今後の課題としたい。

参考文献

- 宇佐美 まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』662 昭和女子大学近代文化研究所 pp. 27-42
- 大堀 壽夫（2002）『認知言語学』東京大学出版会
- 小野 正樹（2005）『日本語態度動詞文の情報構造』ひつじ書房
- 楠本 徹也（2015）「中途終了型発話文『～けど』『～ので』の要求・断り行為場面における待遇的談話機能」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』41 pp. 47-60
- 白川 博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 杉村 泰（2002）「格助詞で終わる文について：『～を／が～に』構文と『～に～を』構文』『ことばの科学』15 名古屋大学言語文化研究会 pp. 235-250
- 鈴木 智美（2015）「意見表明に用いられる『かなと思う』：対立・摩擦を避け内に向かう言葉』『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』41 pp. 61-78
- 孫 思琦（2016）「文末に現れる接続助詞カラの機能」『国際日本研究』8 筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻 pp. 257-246
- 張 季媛（2018）「接続助詞を用いた中途終了型発話文の出現状況と文法的特徴」『日本語・日本学研究』8 東京外国語大学国際日本研究センター pp. 1-21
- 永田 良太・大浜 るい子（2001）「接続助詞ケドの用法間の関係について：発話場面に着目して」『日本語教育』110 pp. 62-71
- 永田 良太（2015）「談話展開から見た接続助詞ケドの言いさし表現：トピック展開とターン・テークにに着目して」『日本語学』34（7） pp. 14-24
- 日本語記述文法研究会（編）（2017）『現代日本語文法4 モダリティ』くろしお出版
- 朴 仙花（2008）「現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現について」『言葉と文化』9 名古屋大学

- 大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻 pp. 253-270
- 森山 卓郎 (1992) 「文末思考動詞『思う』をめぐって：文の意味としての主観性・客観性」『日本語学』11 (9) pp. 105-116
- 山岡政紀 (2011) 「『と思う』構文の発話機能に関する対照研究」『日本語コミュニケーション研究論集』1 日本語コミュニケーション研究会 pp. 93-102
- Maki Shimotani, and Tomoko Endo (2014) "Sequential patterns of storytelling using omotte in Japanese conversation" *Journal of Japanese Linguistics* 30. pp. 33-53

注

- 1 張 (2018) では、計 1,454 例のうち、中途文「～から。」は 493 例、中途文「～て。」は 301 例、中途文「～けど。」は 271 例であったとしている。
- 2 中途文「～から。」を対象とする先行研究には、朴 (2008)、白川 (2009)、孫 (2016) などがあり、中途文「～けど。」を対象とする研究としては、永田 (2001, 2015)、朴 (2008)、白川 (2009)、楠本 (2015) などが挙げられる。
- 3 本稿では、データ収集の対象として、現代日本のテレビドラマ、『日本語日常会話コーパス (モニター公開版) (CEJC)』、および『現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版 (BCCWJ-NT)』の 3 種類を用いる。詳細については、第 3 節において述べる。
- 4 白川 (2009) では、中途文「～て。」の「感嘆」という意味・機能には、「陳謝」、「感謝」、「非難」のほか、その表す感情の種類をそのように明確に分類して表現できないものもあるとしている。例えば、「このマフラー、あったかくて。」 (白川 2009 : 158 (39b)) という例について、主節を強いて補うとすると、「このマフラー、あったかくて、気持ちがいい／わたしは幸せだ／好きだ／いい。」のように、好悪・快不快といった、比較的未分化な感情表現を想定できる (白川 2009 : 158-159) としている。本稿では、このような比較的未分化な感情を表す「感嘆」を、「感嘆 (未分化)」と表示することとする。
- 5 「～と思う」文において、引用節の述語が断定形るときには、①未知のことに對して話し手なりの判断を示す用法、②話し手の記憶の中での不確かさを表す用法、③引用節に示した判断・意見が話し手の個人的な主張であることを明示する用法という 3 つの用法があり、一方、引用節の述語に断定形以外の判断形式や意志形が現れたときには、話し手の個人的な判断や意向を相手に表明する用法になる (日本語記述文法研究会 2017 : 184) としている。
- 6 Shimotani and Endo (2014) では、収集した 81 例の「思って」文のうち、物語を語る連鎖において使われる「思って」は計 47 例であり、全体の 58% を占めるとしている。
- 7 CEJC は、様々なタイプの日常会話 200 時間をバランス良く納めた大規模な会話コーパスであり、調査者は立ち会わず、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことで、日常会話をより自然な形で記録するという特色を持つ。 (<https://pj.ninjal.ac.jp/conversation/corpus.html> より 2019/06/18 最終アクセス)
- 8 BCCWJ は、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築したコーパスであり、現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスである (https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/ より 2019/01/25 最終アクセス)。なお、本稿において抽出したデータは、ほぼ書籍、ブログ、知恵袋、雑誌、ベストセラーのジャンルのものである。
- 9 これらの 4 本のテレビドラマは、①現代日本社会を背景としたものであること、②現代日本語における共通語が使用されていること、③発話場面の文脈や、発話者同士の人間関係などが明確であり、かつ豊富であることという 3 つの選択基準 (張 2018 : 6) を参照し、選択した。4 本のテレビドラマの総時間数は、計 2,115 分であり、約 35.25 時間である。
- 10 ただし、本稿において抽出された BCCWJ のデータは、ほぼ書籍、ブログなどのジャンルのものであった。したがって、中途文「～と思って。」の前後の文脈には、話し手や相手の発話より、叙述・描写などの表現が現れる場合が多く、中途文「～と思って。」に関する前後の文脈との関わりなどの特徴を、その発話を手がかりに捉えるのは難しいという難点がある。そのため、中途文「～と思って。」の前後の文脈を考

察するにあたっては、BCCWJのデータを用いず、主としてテレビドラマおよびCEJCから収集したデータを使用することとした。

- 11 3つのデータ収集対象から抽出した中途文「～と思って。」の中には、「って思いまして。」「って思いまして（終助詞付き）。」の形式の例はなかった。
- 12 ここで「関連」というのは、中途文「～と思って。」が表明する話し手の意思などの内容の詳細が、「～と思って」の直前に現れる表現の表現態度と関連することによって決まると考えられるということである。
- 13 単位が異なる場合、数値を単に見比べても比較検討が難しいが、Z検定は、このような場合に用いられ、データ群を標準化することで並列に比較検討が可能になる統計方法である。
- 14 判定水準については、有意水準を5%とし、Z検定統計量の絶対値が1.960より大きい場合に、「～と思って」の直前に現れる表現の出現比率が、中途文「～と思って。」と複文「～と思って、…。」において有意に異なると判定できる。
- 15 3例のうち、残りの1例では、「実はさ、ちょっと相談に乗ってもらえないかと思って。社員旅行の幹事になっちゃってさ…」という話し手の発話が見られる。ここでは、中途文「～と思って。」を用い、言いづらい状況で自分の依頼を試みに相手に表明していると考えられる。相手はその依頼を受けるかについて、話し手は心配しているが、この後続文脈では、意外なことに、相手は「もちろん!」とその依頼を受けている。これも「相手が否定的な態度をとる可能性が高いと予想される時に使われやすい」という使用文脈の特徴と一致している。